



平成二十三(二〇一一)年度の研究開発推進機構公開学術講演会は、皇學館大学教授、本学伝統文化リサーチセンター客員教授の櫻井治男氏を講師に招き、「地域神社研究のこれから―絆(きずな)と縁(えにし)の神社学―」と題して、十月一日(土)十五時より学術メディアセンター一

公開学術講演会
「地域神社研究のこれから―絆(きずな)と縁(えにし)の神社学―」
櫻井治男(皇學館大学教授)

階の常磐松ホールにて開催され、約百三十名の参加者が熱心に聴講した。

地域活動と神社

最初に櫻井氏は、幼いころに移り住み育った京都府宇治市内にある旦那木(あさくら)神社の明細帳などを資料として示しながら、子供時代のお宮への親しみ、旧来の住民を中心とする祭りに新しい住民が遠慮しつつ参加する体験、そして長じて研究者となった後にこの神社の境内樹木伐採問題について意見を述べる機会があったこと、などを挙げ、自身の「お宮の記憶」について振り返った。そしてこうした経験を「子供のころの思い出深い「お宮」に、大人になつてから戻っていくような体験」と表現し、自身の原初的な神社との関わりが、その後の神社研究の問題意識につながっていく例として説明した。また近年、三重県名張市の秋葉山において、明治末の神社合併の結果社殿が無くなった山上の旧社地の整

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol.5 No.2
 発行人 阪本 是丸
 編集人 遠藤 潤
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0162
 FAX (03) 5466-9237

目次

- ◆ 公開学術講演会「地域神社研究のこれから―絆(きずな)と縁(えにし)の神社学―」(皇學館大学教授/櫻井治男) 1
- ◆ 第二回渋谷学シンポジウム「渋谷を描く」 3
- ◆ 第二十七回日本文化を知る講座「二十周年記念講座 現代に息づく神道文化」 4
- ◆ 国際研究フォーラム
「デジタル映像時代の宗教文化教育―開かれたネットワークによる取り組み―」 6
- ◆ 英国セインズベリー日本藝術研究所交流事業
研究集会「Shinto in Archaeology」 8
- ◆ 共存学フォーラム二〇一一
「生命(いのち)と文化の多様性―森・里・海の絆を結ぶ―」 10
- ◆ 平成二十三年度伝統文化リサーチセンター活動報告 11
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会事業
「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告 12
- ◆ 景観 14
- ◆ 資料紹介「宮地直一コレクション」 16

備や伝統の復興・継承が試みられており、その中で旧来の住民と新住民とが、神社を共通項として新しい関係性を築いてゆく事例を紹介し、自身もそこに関わっていることを述べて、講演の導入とした。

神社研究のこれまで

次いで櫻井氏は、昭和三十八年刊行の『神道論文総目録』、及び平成元年刊行の『続・神道論文総目録』における項目分類を挙げて、これまでの神社研究の展開について概観し、特に氏が取り組んできた神社合併研究については、主に制度や神社行政の側面から扱われてきたことを確認した。また、自身が岡田莊司氏と共に担当した、平成十二年刊行の『現代神道研究集成』第六巻「神社研究

編」解説について触れながら、戦後の神社研究の展開について、時間的・空間的広がり、性格的広がり、そして関連諸学からのアプローチ、といった各側面から説明した。

皇學館大学に学び神社研究に触れた頃、櫻井氏が出会った文章として、昭和四十三年に当時の西高辻信貞・太宰府天満宮宮司が朝日新聞に寄稿した「現代神道論」がある。その内容は、戦前の神道を踏まえ、戦後の神道がどういう方向性を目指す必要があるか、を述べたものであるが、この中で「神道改革への私見」として三つの課題が指摘されていた。即ち第一が、神道は日本文化の核として社会変革に対応し、地域社会への郷土の研究や、生活心情のリズムに応答し生きていくべきだ、という

考え方。第二は、近代化により農村
共同体的生活を基盤にした従来の氏
神信仰の形が変化しているが、この
信仰問題についての説明体系をいか
に提示できるか。第三は神道の文化
的性格についての使命感を再確認し、
その核としての土着思想が普遍的な
人間性につながることを、神道と
してどのようにとらえるか、である。
櫻井氏はこの文章から、ごく普通の
神社の存在のどの側面に注目するこ
とが重要であるか、という、その後
の研究に結ばれる示唆を受けたこと
を述べた。

神社整理・復祀問題を例に

その上で櫻井氏は「地域社会にお
ける神社」という問題関心に基づい
て、三重県を中心に幾つかの地域社
会を対象に行った調査に即し、「神
社の合併」及び「過疎化」「干拓地
の神社」に関して得られた研究成果
について、具体的に解説した。

まずは神社整理、「神社の合併」
について。この問題を考える上での
重要な着眼点として櫻井氏は、原田
敏明氏の「お宮と神社は違う」、神
社はたくさんあっても、地域社会に
とって「ムラの神」の性格を持つ
「お宮」は一つ、という教えを挙げた。
また、昭和四十九年に発足した「式
内社研究会」での活動における西川
順土氏の指導に基づく、神社明細帳
などの神社資料を用いた研究調査方
法について述べ、明治初期の神社取
調書や明細帳などには、未だ十分に
読み込まれていない資料も多いこと

を指摘した。

神社整理については、戦前期は西
川順土氏の研究があるのみであった
が、戦後は今日まで様々な研究がな
されている。神社合併政策は、「成功」
「失敗」と単純評価できない問題で
ある。学術的課題としても、カミを
祀る人々の社会の在り方や意識、社
会関係をどのように読み取るか、「カ
ミをマツル」「カミがマツラレル」
とはどういうことか、という複雑な
諸問題が論じられている。こうした
中で櫻井氏は、神社合併と復祀に関
する自身の研究でも、地域の調査現
場では、非常に多様な課題が浮かび
上がり、「戸惑い」を感じることも
少なくないこと、などを挙げ、調査
現場の実例を写真や地図等を用いな
がら解説した。

このような実例として、やはり神
社合併の対象となり社殿が失われた
場所が、ムラの人々にとっては「お
宮」として扱われ、実際に祭典など
も続けられている例や、行政村内
での近代的、合理的な約束事とし
て、複数の集落の中間に公共施設た
る「神社」を創建した、と見られた
事例が、実は近世以来の水利権と深
く関わっていた例、などが、具体的
に示された。そして神社合併の研究
については、国の施策展開等のみな
らず、それを受け止める、或いは反
対する側についても、各地域におい
て神社が持っていた意味や、神社以
外の聖なる場所の意味、への問いか
けが重要であることが強調された。

地域コミュニティと神社

さらに、このような問題関心に基
づく「過疎化」調査の例として、昭
和五十四年ごろ滋賀県の過疎集落が
集落ごと山中から麓へ移住する際に
実施されたお社はどうか扱われるの
か、移住先での宗教生活、元のムラ意識
の変化など、に注目した調査の例が
挙げられた。

こうした新たなコミュニティにお
ける宗教の観点から、戦後の干拓地
での神社創建の事例として、滋賀県・
大中の湖における三つの集落の神社、
そして秋田県・八郎潟の神社が、具
体的に取り上げられた。それらの事
例の説明に基づき櫻井氏は、地域コ
ミュニティの内部での人々のつなが
りには色々な様相があること、新し
いコミュニティで人々がつながりを
持つには時間がかかること、単に機
能的な面だけではなく、情緒的・感
情的な面も含めた「何か」が必要に
なる時、そこに神社が存在する意味
も見えてくる、といったことを指摘
した。

これからの「神社学」

地域社会と神社についての以上の
ような研究動向及び研究成果と考察
を踏まえ、櫻井氏は「これからの神
社学」について、「深まる神社研究
×拡散する神社研究」そして「災害
と神社研究」の二つの側面から、課
題と展望を示した。

まずは現状として、個別神社の
研究はこれまでの蓄積もあり深まり
を示しているが、他方では現代の神

社は非常に多様であり、その全体的
特徴の把握は困難であることが指摘
された。これはまた、日本文化の核
にある神社の伝統性への認識の深ま
りと、現代社会の中で変容する部分
とを、研究の中でどのように整合性
を持って捉えるか、との課題である、
とした。

もう一つの点は、平成二十三年三
月十一日の東日本大震災とどう向き
合うか、との問題と直結する。震災
では多くのコミュニティが喪われ、
神社が破壊された。櫻井氏は、この
状況は、人為的理由による神社喪失
である神社合併とは異なるが、復興
における人々の絆の重要性が認識さ
れる点では、神を祀る場の在り方、
復祀の問題等とも深く関わる、と指
摘した。そしてその上で氏は、江戸
期の尾鷲湾における地震・津波とム
ラの変容を示す史料を実例として示
し、御社が地域社会をどのようにま
とめる存在たり得ていたのかを、こ
うした史料に基づいて対話し多角的
に検討するための、研究者ネット
ワークの形成が重要である、と提言
した。

最後に櫻井氏は、地域神社を見る
視点として、人々が「縁」を感じる
非合理的な部分、精神的な結びつき
を強くする「絆」に注目し、その内
実について、神社研究を通して振り
返ること、更にその知見を日本の復
興に向けて如何に活かすかが、いま
本当に問われている、として、講演
を締めくくった。

第二回 渋谷学シンポジウム 「渋谷を描く」

研究開発推進センター「渋谷学」プロジェクト(渋谷学研究会)は、平成二十三年(二〇一一)年二月十九日(土)午後一時三十分から五時三十分にかけて、國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホールを会場として、第二回國學院大學渋谷学シンポジウム「渋谷を描く」を開催した。

企画者は「渋谷学」のうち都市民俗的アプローチの中軸を担う長野隆之氏(本学文学部准教授)である。渋谷は「若者の街」として漠然とイメージされているが、実際にはどのような捉えられてきたのか、あるいは、どのように表現されてきたのか。このような問題意識のもと、このシンポジウムでは民俗誌や写真など現実を捉えようとした記録や、映画や文学といった虚構世界を含む表現媒体をあわせて検討し、その上で統一的な「渋谷」像を描くことの可能性を探った。

民俗の視点から長野隆之氏、文学の視点から服部比呂美氏(渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)、映画の視点から福谷修氏(映画「渋谷怪談」監督)、写真の視点から佐藤豊氏(渋谷区在住カメラマン)がそれぞれ発題を行い、倉石忠彦氏(本学文学部名誉教授)が都市民俗の立場から、田原裕子氏(本学経済学部教授)が地理学の視点からコメントした。司会は遠藤潤である。

長野氏は企画者として、渋谷学という学際的共同研究での体系化の前

提には、さまざまに描かれた「渋谷」の蓄積と分析が不可欠で、本シンポジウムはその一環であると説明した。

次いで同氏は、渋谷学叢書『渋谷をくらすー渋谷民俗誌のこころみー』に基づき、渋谷に関わる都市民俗の視点からの問題のあり方について述べた。われわれがイメージする「渋谷」の具体的な範囲やブランドとしてのシブヤの特徴について説明した。民俗調査としては、渋谷に暮らす人々における生活文化の伝承をさらに調べる必要があるが、他方われわれがイメージする「渋谷らしさ」は民俗調査ではなかなか出てこない指摘した。

文学の観点からは服部氏が発題を行った。同氏は近代の渋谷区域の開発の進展過程を説明した上で、この地域に対する文学者の関与について、時系列と空間内での位置を関係づけながら論じた。渋谷に関わった文学者には国木田独步、田山花袋、与謝野鉄幹、柳田国男、高野辰之、島木赤彦、鈴木三重吉らがいるが、最初に銚子の出身で宇田川町に住んだ独歩に光を当てた。独歩は、明治二十(一八八七)年に著した「今の武蔵野」で渋谷を武蔵野の雑木林の一環として把握し、都市と田舎の残った風景の境界であって人の物語のあるところと理解した。さらに、同氏は独歩に心を寄せていた花袋を取り上げ、彼が渋谷を描写する際に

眼前の自然に触れて出身地たる田舎の風物を想起し、そこに物語を看取る点が独歩と共通するとした。

映画の観点からは福谷氏が渋谷を舞台にした映画について論じた。戦前の渋谷駅前を舞台とした「ハチ公物語」(一九八七年)、公開当時の流行最先端だった東京タワーに行く途中で破壊される町として渋谷が登場する「モスラ」(一九六一年)、業務用デジタル小型カメラの普及によって従来の大型カメラでは困難だったロケが克服された時期にそうしたスタイルで渋谷を撮影した「ラブ&ポップ」(一九九八年)、阪神大震災や地下鉄サリン事件の後における都市の破壊がモチーフとされ、その対象として渋谷が登場する「カメラ3」(一九九九年)、そして都市伝説の場として渋谷を扱った福谷自身の監督作「渋谷怪談」(二〇〇三年)などを取り上げ、その時代背景や映画の特色を説明した。

四人目の佐藤氏は商業カメラマンである傍ら、渋谷の写真資料を収集し、写真集『渋谷の記憶』シリーズ四冊を刊行してきた。シンポジウムでは第二冊掲載の写真を示し、今は見られなくなった渋谷の諸風景について説明した。千駄ヶ谷にあった回陽舎の牧場や御万榎、今は上を道路が覆っている原宿付近の渋谷川の古い風景、代々木上原駅近くにあった水田跡の池など、今日とは大きく異なる景色を中心に写真を紹介した。

コメントでは、倉石氏は「対象としての渋谷」に関して、渋谷を対象として渋谷を知ろうとするのか、あるいは広く日本文化を知ろうとする

のかによって、かなり視点が異なる指摘した。民俗で把握する場合は対象設定とその理由が問題となる。文学については、文学者が渋谷を選んだ理由やその結果生まれた文学の性格に興味があると、映画では都市の持つ光と影を渋谷を通じてどのように把握しようとしているのか知りたいとした。さらに、写真については現在と過去の比較によって渋谷独自の变化を見出せば都市民俗研究にも有益だと述べた。

田原氏は地理学の観点から、四名による発題を東京圏における渋谷の相対的な位置という軸に即して受け止め、主として服部氏と福谷氏に対してコメントした。服部氏の発題については、当時の渋谷は町と田園の境界という性格を帯びており、そこに文学者達が町を見出したのか田園を見出したのかというのは、地理学の面からも納得がいくとした。福谷氏には、現実の撮影が難しく、CGなどが用いられるからこそ渋谷がある意味で虚実が入り混じった、非常に近未来的な存在になっているのではないかと指摘した。

なお詳細については、本年三月刊行予定の渋谷学ブックレット『渋谷を描く』を参照していただきたい。

このシンポジウムの企画者である長野隆之氏は、平成二十三年(二〇一一)年十二月五日に逝去されました。渋谷学におけるこれまでのご尽力に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

(文責・遠藤潤)

第三十七回 日本文化を知る講座 「二十周年記念講座 現代に息づく神道文化」

第三十七回「日本文化を知る講座」は、平成二十三年六月四日、十一日、十八日、二十五日の四回にわたり、総合主題「二十周年記念講座 現代に息づく神道文化」のもと、本機構主催、渋谷区教育委員会共催により本学百二十周年記念二号館二一〇一教室にて開催された。

今回は、同講座が開始された平成二年の第一回から、平成二十二年をもって二十周年を迎えたことを記念し、その第一回の講師をつとめた本学の茂木栄教授、杉山林継客員教授(伝統文化リサーチセンター長)、阪本是丸教授(研究開発推進機構長)、井上順孝教授(日本文化研究所長)に再度登壇を依頼した。「現代に息づく神



道文化」を総合主題とすることは平成二十二年末には決定しており、各講師の個別の題目も本年三月上旬には決まっていたが、三月十一日以降の東日本大震災の影響により、本講座の開催を状況によっては中止することも想定しつつ、準備を進めた。開催を決定し、一般への告知を開始すると、当初の想定を超える約四九〇名の申し込みがあり、本講座への関心の高さがうかがわれた。

各回の講座の内容は、この二十年間神道研究を牽引してきた講師四名が、それぞれの研究視点から多角的に現代の神道を問う、充実したものとなった。さらに各講師はその講座内容を通して、震災後の「現代」日本に語りかけた。以下、各回の講座の概要を紹介する。

「忘れてはならない稲作の風土観念」

茂木栄(本学教授)

茂木氏は平成二年の第一回講座において「稲と日本文化―山の祭と田の祭―」と題し、山の神楽と田のお田植え祭を取り上げ、芸能の持つ意味について述べた。今回はそれをさらに展開し、祭りに見られる風土観念について宗教民俗学的視点から論じた。

「社」という漢字は、「示」と「土」からなり、土の神を祭るさまを表す。そして古代日本においては神威を感じるような「モリ」に「社」「神社」の字を充てて区別していたとされる。

日本の稲作集落の構造を考える。家並・街道の社会・経済軸を水軸とし、祭りのときに顕在化する山宮―里宮―田宮の信仰軸を垂直軸とすれば、この交点にコミュニティの「芯」を見出すことができる。そこは神と人の往来の中心である。

岩手県の気仙沼湾の浄化に成功した、室根山の「森は海の恋人」植林運動の背景にも、海と山をつなぐ祭礼の存在があった。室根神社の神は、養老二年に気仙沼湾岸の集落に迎えられ、そこで託宣を下し、室根山に祀られたとされる。その託宣の際に潮水を奉った漁師の家系とされる畠山家は、現在の祭祀においても重要な役割を持っている。この植林運動を開始し、現在も主導している漁師の畠山重篤氏は、この畠山家の人物である。室根神社の祭祀には、天と地、さらに海をつなぐ風土観念が見て取れる。祭りにおける山と海の人々の絆が、気仙沼湾を浄化する植林運動に結実した。

しかし、今年三月十一日の大地震にともなう大津波は、気仙沼湾の集落を破壊し、畠山氏の牡蠣養殖場も壊滅してしまった。そもそも南東北地方の沿岸部には、浜下り祭など山と海をつなぐ祭りが多い。今後の被災地の復興に、祭りの絆は支えになるであろうか。

また、奈良県の大和盆地の風土を考えてみると、日本の国づくりにもこの風土観念が生かされたことがわかる。「延喜式」に記載された神社の立地と祭祀をみると、大和盆地の水源地の山と、下流の水田地帯が、神

社でネットされている。人間の生活風土は神の社(モリ)に守られてきた。「大和は国のまほろば たたなづく青垣山こもれる倭しうるわし」という和歌は、大和の「子守り」の風土を表していると解したい。そして、この大和の風土観念は、地方にも国府総社の祭りという形で移されていったと考えられる。

「弥生・古墳時代から続く鏡・玉・剣のまつり」

杉山林継(本学客員教授)

本講座第一回「古代人の宗教生活」においても、杉山氏は鏡・玉・剣の信仰を取り上げていたが、これは氏にとつて、それ以前からの一貫した研究テーマである。氏はそれ以後の研究資料の増加や研究の進展を踏まえ、多数の画像や文献史料を紹介しつつ、講座を展開した。

まず、鏡については、四つの側面から考えることができる。①「装束・儀仗具・荘厳具としての鏡」については、北野神社の殿内や『春日権現験記』の神輿に掛けられた多数の鏡に見られるように、装飾性と神聖性を合わせもつ神鏡の性格が見て取れる。神仏習合の時代には、鏡が経筒を守るという信仰も見られた。②「依代としての鏡」は、記紀の天岩戸や天孫降臨の場面で語られているが、伊勢を始めとして各地で御神体として祀られている。神仏習合時代には鏡に仏も彫られる。鏡は真実の姿を表すものと考えられている。③「奉納鏡(神宝)としての鏡」も、日本列島の工夫を凝らした鏡が、神を喜ばすものとして奉げられてきた。

そして、④「文学作品に見られる鏡の信仰」は、『万葉集』『源氏物語』『土佐日記』などに、形見の鏡、姿を写し取る鏡、身替りの鏡など様々な形で鏡が登場する。『大鏡』『吾妻鏡』というように鏡は歴史を表し、「手鏡」として手本となり、正体を表すもの、正体を見破るものとされた。

次に玉であるが、「タマ」には玉、瓊、璉などの字が充てられ、『古事記』等の古典において、微妙に使い分けられている。素材も翡翠、真珠など多様である。しかし玉は祭祀に関わるものであり、例えば全国から出土している子持勾玉は、勾玉に小さな勾玉が付着している形状をしておりこれは子供や蚕などの繁殖・繁栄を象徴するものとも考えられる。玉依姫の神話のように、玉は魂の表れと考えられたのではない。

また剣についても、考古遺物や、伊勢、熊野を始めとする各地の神社の御神宝、あるいは御神体として、全国各地に所在している。素材や形状は、年代や地域によって多様だが、実用品ではない飾り太刀や長大な剣が、神への奉納物や副葬品とされてきた。

鏡・玉・剣が揃った形で発掘された最古の遺跡は、福岡市の吉武高木三号墓であり、弥生時代中期の紀元前二〇〇年頃のものと推定される。朝鮮半島から渡来したと考えられる鏡と銅剣、糸魚川産と見られる翡翠の勾玉が出土している。そして後代には周知のとおり記紀に三種の神器として記されるようになる。

鏡・玉・剣は、東北から九州まで祭祀遺物として出土している。これ

らのモノは、年代や用途、形状などの差異を徹底して明らかにしなければ、使用された要因や、相互の関係性を追究できない。しかし、それらのモノが共通に持っている意味から、日本列島人がなぜ鏡・玉・剣を祭祀に用い続けてきたか、その思想や信仰を考察することもできよう。

「神道から描く現代日本」

阪本是丸(本学教授)

阪本氏は、冒頭で現代の神道に言及した研究として、石井研士氏、井上順孝氏、島蘭進氏、入江曜子氏の所論にコメントしつつ、従前十分に検討されていない戦後の神社神道の動向を正面から考察した。

戦前の国家管理から、敗戦後に突如として一宗教法人とされた神社神道は、激しい社会変化に対応を迫られた。神道・神社に関する様々な問題、例えば「神道は宗教か否か」といった問題について、内外でオープンに議論されるようになった。国家の法制度やGHQ「神道指令」にも、その新たな認識が示され、神社界内部においても、包括する神社本庁が設立されたものの、それぞれの神社のあり方によって様々な神職の意見があり、それは折口信夫と葦津彦彦の意見の対立にも表れている。しかし、こうした激しい変革のなかでも、変わらないものもあつた。戦後の神道をめぐる詳らかな歴史と、それをめぐる様々な言説は、明らかに「見える」神道の動向として、もっと検討される必要がある。それを通して初めて「見えない」神道を考えることができないのではないか。

そして阪本氏は最後に、自身の本講座第一回の題目「明治期における日本文化の激変」に絡めて、現代日本における祝祭日の意義を問い、講演を締め括った。

「世界から見た神道」

井上順孝(本学教授)

世界から、すなわち日本社会の「外」から、日本の民族宗教といわれる神道は、どのように見えるのだろうか。それは、日本社会の「内」から神道を見ることは異なる。グローバル化が急激に進む現代においては、考えざるを得ない状況となっている。

日本の海外移民は、ハワイや北米、南米に海外神社を創建し、現在も祭り続けている。海外における神社の祭り(神道)のあり方は、異文化社会における彼らの努力や工夫から生み出されたものであり、神道と異文化との葛藤と融和の様相を示しており、興味深い。しかし、彼ら日系人は二世、三世と世代を下るほど、キリスト教徒が増え、神社を守り続けることも難しくなってくる。彼らの信仰は、日本を離れて暮らす人々の立場に立つて見ないと理解することができない。

次に国外の研究者は神道をどう見ているか。これまでに多くの国際シンポジウムを企画・開催して、国外研究者と交流してきたが、そこで明らかになることは、まず、神道に関心を持つ研究者の少なさである。仏教に比して格段に少ない。それでも少数の優秀な研究者は存在するが、彼らの問題関心は、①古事記・日本

書紀の成立、②神話の解釈、③神道の起源、④「国家神道」の問題、⑤靖国問題などに偏っている。このことは国外における神道の正確な情報の不足や、神道への無理解が大きな要因ではないか。

本学日本文化研究所は、国外研究者との交流をふまえ、『神道事典』を英訳し、Encyclopedia of Shinto (EOS)として、インターネット上に公開した。国外では好評を得ており、アクセス数も伸びている。イスラーム圏のテレビ局アルジャジーラが取材に訪れ、神道を紹介する番組を制作したこともある。

現代はグローバル化と同時に高度情報化も急激に進んでいる。インターネット上には、世界中の人々によって神道に関連する情報が発信されている。その中には興味本位なものや怪しいものも多く、「遊び」と「学術」の境界線が曖昧になっている。このような時代には、神道の正確な情報を我々研究者が積極的に発信する必要がある。国外へ向けて神道をわかりやすく説明することは、国内で神道を説明する方法を向上させることにもつながるのである。

そして、相互に理解し合うためには、世界には多様な価値観をもった人がいる、ということを確認し合う必要がある。価値観の「正誤」を糾す議論は無意味である。「なぜ理解されない(できない)のか」、「どうしたら理解される(できる)のか」を相互に問い続ける、そのプロセスを考える方が重要であろう。

(文責・森悟朗)

国際研究フォーラム

「デジタル映像時代の宗教文化教育
—開かれたネットワークによる取り組み—」

日本文化研究所では、科学研究費補助金「宗教文化教育の教材に関する総合研究」、及び宗教文化教育推進センター(CERCC)との共催により、平成二十三(二〇一一)年十月十六日に常磐松ホールを会場として、国際研究フォーラムを開催した。

テーマは「デジタル映像時代の宗教文化教育」であったが、サブタイトルの「開かれたネットワークによる取り組み」に示されているとおり、この問題に直接関係をもつであろう研究者等の間の広がりあるネットワーク形成をめざすものであった。「デジタル映像時代」という表現は、YouTube、ニコニコ動画といったインターネット上のサイト、あるいはスマートフォンといった新しい媒体により、デジタル映像が身近になっている現代社会を念頭に置いたものである。こうした時代においては、宗教文化の理解を深めるための宗教文化教育も、以前とは異なった方法が生まれるが、それと同時に新しい問題ないし課題にも直面することになる。

こうしたことは多くの国において、ほぼ同時進行的に起こっているのであり、かつ初等教育から高等教育に至るまで、すべての教育過程に関

わってくる大きな課題である。それゆえ、発題者には二人の外国人に加え、中等教育に関わっている教員にもはいつてもらった。

* フォーラムは午前十時半から午後五時半までと、かなり長丁場であった。五つのセッションとコメント、総合討議というスケジュールで行われた。

まずパネリストについて紹介する。発題者と発題のタイトルは次のとおりである。

・織田雪江氏(同志社中学校・高等学校)「中学校社会科における宗教文化の取り上げ方と映像を用いた授業」

・岩谷彩子氏(広島大学)「映像による宗教文化教育の課題—インドを映す映像とその受容のされ方をめぐって—」

・エリカ・バッフェリ(Erica Battelli)氏(ニュージーランド、オタゴ大学)「ニュージーランドの大学における Blended teaching と宗教文化教育—大学ティーチングの再考—」

・アラン・カミングス(Alan Cummings)氏(イギリス、ロンドン大学)「一回性の限界—芸能教育におけるデジタル動画の活用—」

・平藤喜久子氏(國學院大學)「宗教文化の授業とデジタル映像—その可能性と課題—」

コメンテーターは、宗教社会学者であり、大学における初學者教育を専門としている岩井洋氏(帝塚山大学)で、司会は、國學院大學の黒崎浩行氏と、ノルマン・ヘイヴンズ(Norman Havens)氏が担当した。

冒頭で井上が企画者側として趣旨説明を行った。共催の意味についてはも述べた。続いて発題となったが、以下、発表順にその概要を示す。

織田氏は、中学校の社会科の教員である。平成二十四(二〇一二)年度から新中学校社会科学習指導要領が実施される。このことに直接影響を受ける立場から、社会科の教科書における宗教文化の扱いがどう変化しているのかを、具体的に教科書、関連する資料・データ類を示しながら論じた。とくに国際理解教育という観点から、宗教文化を扱う際に、今後どのような映像の使用方法が考えられるのかという点について具体例を示した。アメリカにおける日系人を扱った映像ニュースをテーマにして、どのような授業実践を行っているかが紹介された。

岩谷氏は、インド宗教の専門家であり、みずから現地の霊媒師の憑依の様子などを撮影し、編集、字幕作成などをした上で、これを大学の授業で使用している。この経験をもとに、商業的な目的で撮影された映像、宗教映画など、異なった制作目的によって作られた映像を示しつつ、映

像がメッセージを構成する装置であるという観点から、映像と宗教文化の問題をとらえるべきであると論じた。また、制作者の意図と学生が受け取る感覚とのズレについても、学生のコメントを紹介しながら論じた。

エリカ・バッフェリ氏は、ニュージーランドのオタゴ大学で日本宗教についての授業を担当している。同大学では e-learning による遠隔地教育を採り入れており、その場合 YouTube などの映像をつかった授業は大変便利であると示した。とくに口頭や文章で説明するには複雑すぎることを、映像によってきわめて理解しやすいものにする事ができるといふ点で効果的であり、また学生の注意を引きやすいというメリットもあるという体験が述べられた。他方、著作権への配慮や、YouTube のようにインターネット上にあるものの特性として、いつ映像が消えるかわからないという点、また情報を評価する難しさといった独特の困難さもあることに言及した。

アラン・カミングス氏は、ロンドン大学で歌舞伎の研究をしており、古典文学、古典芸能の授業を担当している。今回の発表では、とくに古典芸能の授業で YouTube を使用することで得られる効果について論じた。歌舞伎の場合、商業的に作成されたビデオやDVDであると、舞台上だけを映し出し、客席は写さない。客席も含めて民俗芸能として論じる立場からすると、そうした映像では不十分であることを力説した。これ

に対し、YouTube上のアマチュアビデオには、客席も含めた全体的な映像があり、こうなると授業では後者のほうが適切に感じられてくること。またYouTubeのソーシャルネットワーク性というのは、意外かもしれないが、江戸期の俳諧サークルを説明する際の参考にもなるのだということ指摘した。

平藤氏は、日本の大学で留学生、日本人に日本宗教、日本神話について教える際のデジタル映像の活用について、実際に使用している映像を示しながら論じた。古事記のような古典作品の説明の際にも、現代と結びつけて説明する場合には、宮崎駿のアニメや映画に描かれた葬儀のシーンなどが理解に役立つと述べた。また神話学の概念の説明にCMを使用する例などが紹介された。動画が理解を助けるというメリットがある一方で、学生が動画を使って発表を行う際には、説明を動画に頼りがちになるというデメリットもあるという指摘もなされた。

以上の五人の発題を踏まえ、コメントーターの岩井洋氏からは、まず宗教文化教育という枠組みで映像を使用する場合、宗教についてのリテラシーと、映像の質を判断するためのメディアリテラシーと、二重のリテラシーに配慮する必要があることが指摘された。また映像によって見えない部分が見えるようになること、映像がフレームを作ってしまうこと、この二重のフレーム問題が生

じるというのを認識する必要性についても指摘がなされた。発題者に対する個別の質問も投げかけつつ、このような基本的なベースベクトタイプを示すことで、フォーラムの参加者に対する問題提起という形をとった。また、授業デザインのためには、到達目標の明確化と、そのための適切な素材えらびと適切な問いかけが必要であると論じ、教員の意図と学生の反応のズレを認識すべきという見解も示されたが、これは初学者教育問題を扱ってきている体験を踏まえての意見と言える。

この岩井氏の指摘に触発され、会場から二重のフレームの底にひそむさらなる問題に対しても質問がなされた。また海外のe-learningの状況、大学がどのようなバックアップ体制をとっているかという質問や、学生が授業で宗教表現を行おうとする場合、教員はどのような対応をするべきか、映像を受け取る学生と教員との認識のズレの問題など、さまざまな質問がなされた。

発題者との間で活発な討議がなされたが、当初想定されていたとおり、これはまさに国際的にほぼ共通して教育の現場にのしかかっている問題であり、果たして教員の側がそのことを十分に認識しているかどうか問われることになりそうである。というのも、現在の教育の現場では、インターネット上の動画についての情報や、その使いこなしという面では、教員よりも学生・生徒の方が、はるかに場数を踏んでいるの

が一般的だからである。

具体的な質疑応答が重ねられたので、この国際フォーラムの議論は、研究開発推進機構が取り組んでいるデジタル・ミュージアムの動画コンテンツ作成に大きな参考となった。さらにこれを教育の場で活用しようとする際に起こるであろう注意点をについても、いくつか具体的な示唆を得られることとなった。

とくにコンテンツ作成においては、大学教員と初等・中等教育の教員との協力が必要になると感じられた。さらには、デジタル・ネイティブ世代になってきている学生との協力ということも、場合によって非常に有効になるであろうということも考えさせられた。日進月歩のテクノロジーへの対応は、これまでの教育のやり方だけでは非常に難しくなっているのが明らかだからである。

このフォーラムの様子は、一時間に編集され、CSのスカイパーフェクTV・216chベターライブチャンネル(精神文化の時間)で放映された。

好評であったようで、再放送を含めて、次の計五回放映された(時間はいずれも午後九時三十分〜十時三十分)。

平成二十三(二〇一一)年

十一月二十三日(水)

十一月三十日(水)

十二月十四日(水)

十二月二十一日(水)

平成二十四(二〇一二)年
一月二十五日(水)

毎年日本文化研究所が主催している国際フォーラムの様子を、「精神文化の時間」において放映するのは、恒例となってきた。放映したのは、精神文化映像社のご厚意により、DVDとして、寄贈を受けている。また、会議の全体の様子も、デジタルファイルとして保存してある。将来的にはアーカイブとして、これらの一部をまさに国際的に活用していく手立てを考えていきたい。

(文責・井上順孝)



英国セインズベリー日本藝術研究所交流事業 研究集会「Shinto in Archaeology」

研究交流の背景

國學院大學研究開発推進機構と英国セインズベリー日本藝術研究所(Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures)は、日本文化全般を対象とした共同研究の推進や、研究の学際化、研究成果の国際的発信を行なうための整備を目的に、平成二十一(二〇〇九)年七月六日付で「セインズベリー日本藝術研究所と國學院大學研究開発推進機構との間の覚書」を締結した。

セインズベリー日本藝術研究所(以下、SISJACと略す)は、日本文化研究の国際的な促進などを目的に、平成十一(一九九九)年に設立された。これまでも、「日本の考古学および文化遺産プロジェクト」を立ち上げて、日本考古学全般の国際的発信に取り組み、英国・ケンブリッジ大学フィッツウィリアム博物館で開催された國學院大學百二十周年記念事業「英国での縄文展」に協力するなど、主に本学考古学分野との交流を深めてきた。

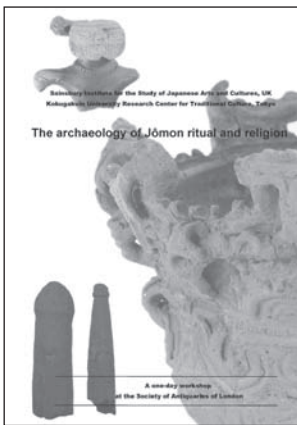
一方、本学研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ(以下、本センターと略す)は、大場磐雄が提唱した神道考古学と、それを展開した祭祀考古学について、国際的・学際的な学問手法を用いて再構築しよ

うと試みている。近年、国際的にも祭祀・儀礼や宗教を考古学的に研究することが推進されており、神道考古学・祭祀考古学は、その一角をなす分野として位置づけられる。そこで、本センターを中心に、覚書に基づいて、積極的な国際交流研究の進展を図っている。

国際交流事業の概要

これまでの具体的な研究交流としては、次に掲げる三つの事業を行なってきた。

最初の交流事業は、平成二十一(二〇〇九)年十一月六日に、英国のThe Society of Antiquariesのバーリントンハウスにて実施した、縄文時代の祭祀・儀礼の考古学研究に関するワークショップ「The Archaeology of Jomon Ritual and Religion」であり、谷口康浩を中心とする本学の若手研究者が参加した。



発表者と発表題目は次の通りであった。谷口康浩「The Social and Cultural Contexts for the Development of Spirituality and Rituals in the Jomon Period」、石

井匠「Pots and Ceramic Figures」、中村耕作「Jomon Pottery as Liminality」、阿部昭典「Secondary Tools in Circular Stone Alignments」、加藤元康「Complicates Process of Constructed Monuments」、手塚美穂「Remember of Place」。

同年と平成二十二(二〇一〇)年には、大英博物館の「Power of Dogu」展と、日本とバルカン半島出土の土偶を比較研究する「Unearthed」展が、The Sainsbury Centre for Visual Artsで行なわれ、いずれにもSISJACが参画している。そこで、SISJACから松田陽氏を招聘して、平成二十二(二〇一〇)年十一月十八日に公開講座「現代社会から見るモノと心―縄文文化からの価値の創出―」を開催し、英国での二つの土偶展を中心に、パブリックア



ケオロジー的試みの紹介があった。また、本センターからは、石井匠が岡本太郎を通じた伝統文化研究のあり方を述べた。

なお、「Unearthed」展については、平成二十三(二〇一一)年一月二十四日から三月十一日まで、本学伝統文化リサーチセンター資料館企画展「縄文人の世界観とカタチ」に伴うパネル展示を行なった。

同年十二月三日・四日には、SISJACの研究協力機関である仏国アルザス欧州日本学研究所(Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace)が加わってワークショップ「Japanese Archaeology」を開催した。本ワークショップは「SISJACが主催したワークショップ「The Archaeology of River Valleys」や本センターのワークショップ「Shinto in Archaeology」で構成される」。

研究集会「Shinto in Archaeology」



これまで、SISJACを通じた国際的研究の発信は、縄文時代を中心に行なってきた。一方、本センターの研究活動は、主に本学考古学の学際でもある神道考古学・祭祀考古学であり、対象とする時代も先史時代か

ら近代までの長い期間を対象としている。通史的な祭祀・儀礼に関する日本考古学の研究は、国際的に発信されておらず、国外においては、この研究領域に関する情報も不足していた。そこで、本研究集会では、最新の研究成果や動向を発表し、国際的な情報発信を行なった。発表者と発表題目は次の通りである。

▼ Shinto in Archaeology

サイモン・ケイナー

本研究集会に至る経緯について話された後に、祭祀考古学 (Ritual Archaeology) の欧米の研究動向を、発表者が実際に係わった事業を中心



で紹介し、その定義や考え方を示した。また国際的な視座からの日本信仰の捉え方が述べられた。

▼ Religious Ceremonies and Rituals of Japan

吉田恵二

古墳時代の祭祀の場として選ばれた海・山・川の景観を重視する具体

的な祭祀遺跡を、社会的背景や国際的な交流を示す出土品とともに紹介し、古代の祭祀遺跡や遺物から見た仏教・道教的影響について述べた。

▼ Reinterpretation of Shinto Archaeology according to Oba Iwao, Professor of Kokugakuin University

中村耕作

大場磐雄が提唱した「神道考古学」の学問的基盤や学問形成の過程、その手法を述べ、本センターの研究活動との関係性とともに、現在の再評価を示した。

▼ Circular Stone Alignments and Landscape in Jonon period

阿部昭典

縄文時代後期の東北地方北部の環状列石を対象とした景観論的研究を、環状列石の立地や景観、「第二の道具」の出土状況や住居空間的構造などからの分析を通じて行ない、その世界観との結びつきについて発表した。

▼ The Relation between Monuments and Sites in the Osarube River Basin, Akita Prefecture

加藤元康

本研究開発推進機構と北秋田市教育委員会との研究協定に基づき、同市石倉岱遺跡の調査研究について、発掘調査や周辺遺跡の踏査の成果概要を話し、その傾向から遺跡周辺の河川と関係する可能性を示した。

▼ The Origins of Shinto from the Viewpoint of Ritual Archaeology

深澤太郎

文献に見る「神道」という言葉の

意味を定義し、同時代の祭祀遺物から、古墳時代までその共通性が認められるとした。その上で、神道の段階的過程を示し、その背景にある古代国家の形成、国際的関係との影響について述べた。

▼ Formation Process of Shinto Place in Izumo

新原佑典

本センターが行なった島根県出雲地域における八重垣神社、飯石神社の考古学的調査から立論された社殿形成の過程の模式図を提示し、さらに、美保神社出土資料から、そこで行なわれた祭祀行為について発表した。

▼ Relationship between Ethnological Belief and Shintoism in the Kuroshio Current Area

内川隆志

伊豆諸島におけるカミ祭りの考古学的な分析方法について、今まで行なってきた調査事例を基に発表した。とくに文化複合的分析視点から想定される琉球列島や南西諸島との関係を示し、カミ祭りの場の形成過程と現状について述べた。

▼ Ishigami: The Worship of Stone in Modern and Ancient Japan

石井匠

日本人の宗教観としての「Monology」理論から構築されたモデルを提示し、そのモデルを端的に示す例として石信仰に焦点をあてて、話した。中でも現代や縄文時代の境界に位置する石の信仰を中心に、その性質について芸術人類学的視点から解

釈がなされた。

各発表後にアンナ・アンドレーヴァ氏がコメントを述べ、その質問を中心に討論がなされた。本研究会の終わりに、谷口康浩が先史時代の立場からの祭祀考古学について、吉田恵二が歴史考古学からの祭祀研究のあり方について、小林達雄から人間学からの祭祀・儀礼研究の可能性について、それぞれ総括がなされた。



SISJACは、展示・講演・シンポジウムなど様々な形で日本文化の国際的な発信を行なう欧州の主要な研究機関であり、常に日本の文化遺産研究を模索している。本覚書の理念をさらに発展させるためには、日本文化研究の領域における国際交流を一層推進していくことが期待される。

(文責・加藤元康)

共存学フォーラム二〇一一 「生命(いのち)と文化の多様性―森・里・海の絆を結ぶ―」

フォーラムの目的

「共存学フォーラム二〇一一 生命(いのち)と文化の多様性―森・里・海の絆を結ぶ―」は、平成二十三年一月二十二日(土)、國學院大學渋谷キャンパスAMC棟一階常磐松ホールでおこなわれた。

本フォーラム開催の目的は、地球の気候変動や生物多様性の崩壊という危機的状況に対して、名古屋で実施された生物多様性条約第十回締約国会議(COP10)の意義と重要性を再認識するとともに、広い視野から文化・社会の多様性という将来的課題を提起し、共存社会の未来について広く話し合うことにあった。

一月二十一日(金)には、本フォーラムの関連企画として、映像の夕べ「生命(いのち)と文化の多様性―里・山の祭と芸能―」上映会が、本学渋谷キャンパス百二十周年記念二号館二一〇四教室で開催された。

フォーラム第一部「生物多様性条約会議(COP10)を振り返る」

第一部では、COP10に向けて平成二十一年一月に結成された市民連携組織「生物多様性条約市民ネットワーク」(CBD市民ネット)の取り組みを中心に、地域と開発、先住民文化、農業、教育・啓発などの視点から、今後の動向と課題について、全体報告と五人の各作業部会関係者

による報告がおこなわれた。

まず、高山進氏(三重大学教授、CBD市民ネット・共同代表)が全体報告「生物多様性条約の意義と課題―NGOの議論とその考察―」をおこない、続いて、各作業部会関係者報告として、「開発・地域・貧困」(森良、エコ・コミュニケーション)

(センター代表)、「世界の先住民から」(上村英明、恵泉女学院大学人間社会学部教授)、「世界に発せられた水田決議」(呉地正行、ラムサールネットワーク日本共同代表)、「人々と種(タネ)の未来」(浜口真理子、CSOピースシード共同代表)、「生物多様性十年への普及・啓発」(川廷昌弘、国際生物多様性年国内委員会地球生息委員)の各報告がなされた後、全体討論「COP10と将来への課題」がおこなわれた。

全体討論(司会〓古沢広祐、國學院大學経済学部教授)では、国家間や国内における様々な格差の問題なども含めて、グローバル化が進む社会の中で、我々がどのような方法で生物多様性の問題を認識し、実際の行動に繋げるのか、会場参加者からの意見も募り、議論がなされた。

フォーラム第二部「文化多様性が紡ぎだす世界」

第二部では、生物多様性に基づく文化多様性を焦点とする、基調講演

と四人のテーマ別報告がおこなわれた。

まず、畠山重篤氏(京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授、NPO法人「森は海の恋人」代表)が基調講演「森、里、海の絆を結ぶ」をおこない、落葉広葉樹の森から生成されるフルボ酸鉄が海に流れ込んで豊かな海をつくることを、牡蠣養殖の実際も含めて報告し、魚貝類が育つ海を維持するためには豊かな森が必要であると述べた。

続いて、個別報告として「山(社)も意味づけてきたか」(茂木栄、國學院大學神道文化学部教授)、「森・川・海の聞き書き甲子園」(洪澤寿一、樹木・環境ネットワーク協会理事)、「東アジアにおける鎮守の杜文化―日本・韓国・台湾の杜の持続保全―」(李春子、神戸女子大学講師)、「多様性の価値をグローバルで考える」(ヘイヴンズ・ノルマン、國學院大學神道文化学部准教授)の各報告がなされた。

茂木氏は、社・神社・社会は同根の言葉であり、「社会」の社とは「もり」神を祀る場所のことでコミュニティの芯を表していると述べ、日本は風土の中に神を配置し、祭りによって風土を宗教的に位置づけてきたと報告した。

洪澤氏は、自然の中から生きるための資源を調達する持続可能な山村の暮らしを見直す必要性を述べ、「聞き書き甲子園」の取組みの中で、高校生が農村地域の高齢者と交流し、

自然や人とのつながりを学んでいく活動の実際を報告した。

李氏は、東アジアには自然と文化における多様性や共存の知恵が古くからあったことを、日本・韓国・台湾の「杜」の文化を通して述べ、「杜」の今後の持続的保全が行政や地域社会の課題であることを報告した。

ヘイヴンズ氏は、文化が多様であるという事実を示す「文化多様性」と、多くの文化の存在を個別に意識的に支援する政策である「多文化主義」との相違を指摘し、多様な基準・価値観が社会の豊かさを生みだしていくとする見解を述べた。



総合シンポジウム(司会〓古沢広祐、國學院大學経済学部教授)では、文化の伝承や多様性に対する具体的な事例を広く共有していくことの重要性やその方法など、今後の共存社会構築における諸課題について議論がおこなわれた。

(文責・宮本誉士)

平成二十三年度伝統文化リサーチセンター活動報告

本年度は、平成十九年度より進めてきた文部科学省オープン・リサーチ・センター事業の最終年度に当たり、これにより十二月に総合シンポジウムを実施した。

総合シンポジウムでは、まず「祭祀遺跡に見るモノと心」「神社祭祀に見るモノと心」「國學院の学術資産に見るモノと心」の各グループの研究成果を総括する基調報告が行われた。続いて、本学の新谷尚紀教授の基調講演が行われた。その後、伝統はいかにして形成され、継承されていくのかについて、各グループの代表及び、新谷教授、立正大学の時枝務准教授を交えて、討論が行われた。これにより、モノと心をめぐる研究方法の練磨や、研究領域を共有する総合研究への期待など、残された課題も明らかとなった。

なお、各グループの成果については、紙幅の都合上、以下に実施済みの事業一覧のみを掲げた。詳細は伝統文化リサーチセンターの機関誌である『伝統文化のモノと心』や、『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』を参照されたい。

●企画展・特別展

「若木ヶ丘の歩けオロチーフィールドワークの足跡を辿って」(四月二十三日～六月四日)
「みこしとひきもの」(六月十三日～

七月三十日)

「神道の歴史とその研究―神社という場と神の姿―」(八月二十日～二十六日)

「国学―日本のこころをみつめる学問―」(九月一日～十月十三日)

「伊勢物語絵の世界―國學院大學学びへの誘い―」(十月十五日～二十二日)

「まつりの継承―季節のまつりとその担い手―」(十月二十九日～十一月十七日)

「神社祭祀絵巻―感じる雰囲気・考える現実―」(十一月十二日～二月二十五日)

●総合シンポジウム

「伝統文化の知恵と実践―「伝統」の形成、「伝統」の未来―」(十二月十日)

【基調報告】大東敬明「國學院における伝統文化の研究」、阿部昭典「祭祀遺跡研究から見た伝統文化の形成」、池谷浩一「祭祀研究から見た伝統文化の現在」、深澤太郎「過去と現在を繋ぐ―伝統の領域横断研究―」【基調講演】新谷尚紀「伝統」とは何か―日本民俗学の視点から―【討議】新谷尚紀、吉田恵二、茂木貞純、武田秀章、〈コメント〉時枝務、〈司会〉杉山林継

●シンポジウム

「国学から國學院へ」(十月八日)

【講演】武田秀章「国学と國學院」【発題】秋元信英「皇典講究所の国学者と史学―黒川真頼の場合―」、阪本是丸「國學院の「国学」―非常時に於ける河野省三、折口信夫、武田祐吉の国学―」、〈コメント〉宮地正人、〈司会〉松本久史

●国際シンポジウム

「東アジアの視点から見た曳山・山車・フロート」(七月十六日)【講演】杉浦康平「山は動く―曳山のデザイン、その意味―」【映像報告】ロッシュ・タケヤマ・ナンシー「インドネシア・バリ島の葬儀山車「バデ」」、モジユガン・ジャンナハラ「イラン 殉教者を称える生命樹の山車」【発題】黄國賓「寧波近郊前童鎮、正月行道の山車「鼓亭」と中国の山車の諸相」、鈴木聡子「神の移動と山―日本の山車祭りの成立背景―」〈コメント〉ゲルガナ・ペトロヴァ、〈司会〉茂木栄

●国際研究会

【Shinto in Archaeology】(十二月四日)【発表】Simon Kaner「Shinto in Archaeology」吉田恵二「Religious Ceremonies and Rituals of Japan」中村耕作「Reinterpretation of Shinto Archaeology according to Oba Iwao, Professor of Kokugakun University」阿部昭典「Circular Stone Alignments and Landscape in Jomon period」加藤元康「The Relation between Monuments and Sites in the Osarube River Basin, Akita Prefecture」深澤太郎「The

Origins of Shinto from the Viewpoint of Ritual Archaeology」新原佑典「Formation Process of Shinto Place in Izumo」内川隆志「Relationship between Ethnological Belief and Shintoism in the Kuroshio Current Area」石井匠「Tshigami: The Worship of Stone in Modern and Ancient Japan」
〈司会〉Anna Andreeva
《開催地：フランス・アルザス・欧州日本学研究所》

●公開講座

「みこしとひきもの研究の視点」(七月二日・九日)【講演】筒井裕「曳きものの地域的差異」(二日)、岸川雅範「神田祭の歴史」(九日)
「北秋田市調査の成果報告」(十月一日)【講演】加藤元康「石倉岱遺跡調査報告」、阿部昭典「環状列石とマツリの道具」
「日本のこころをみつめる学問」(十月八日)【講演】戸浪裕之「河野省三の国学研究」、齋藤しおり「折口信夫の古代研究―芸能史研究を中心に―」、宮川博司「大場磐雄の古代研究」〈司会〉渡邊卓【展示解説】渡邊卓、戸浪裕之、齋藤しおり

「出雲のまわりと信仰」(十一月六日)【講演】吉田恵二「山のまわり、海のまわり」、小川直之「森神と神樹の信仰」
《開催地：島根県松江市・島根県職員会館》

※開催地を記さないものは、國學院大學渋谷キャンパスで行った。

二十一世紀研究教育計画委員会事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会事業として、研究開発推進センターのマネジメント

により推進される学際共同研究である。この共同研究事業は、従来から行われてきた「渋谷学」(リーダー・

文学部教授上山和雄)及び「日本発共存社会モデル構築による世界貢献

(共存学)」(リーダー・経済学部教授古沢広祐)の両プロジェクトを総合的に再編・強化して、本学の建学の精神に立脚しつつ、本学の特色を

活かした地域・社会貢献を可能とする総合的学問領域を開拓しようとするものである。

両プロジェクト合同の初年にあたる本年度は、両リーダーを中心に、参加研究者及び研究開発推進センター担当者による方向性の検討を重ね、人間と人間、人間と環境、歴史・伝統と現代、都市と地域、などの関係に注目して、幾つかの次元で具体的問題領域を設定し、事例調査に基づいて共存社会モデルの抽出を目指すことを確認した。次いでそれに基づき、平成二十三年七月の合同研究会議ほか、両プロジェクトによる会議を行って、本事業全体の方針を協議した。

これらの方法的作業の結果、本事業の対象として、「I 渋谷」(渋谷を中心とした東京

の都市形成史と都市的現実についての研究)、

「II 農山漁村」(地域社会の共同性・拠点・持続可能性に関する研究)、

「III 日本」(日本の伝統文化や社会政策における「共存」の知恵の可能性と限界の研究)、

「IV グローバル化する世界」(地球規模での共存社会の可能性についての研究)、

という四つの領域が設定された。その上で、従来の渋谷学と共存学の両プロジェクトが基本的骨格を維持しつつ、それぞれ「領域I」および「領域II・III・IV」を主に担当すると共に、総合的連携を強めながら課題意識を共有し、領域横断的な成果の集約と検証を進めることを定めた。

以下に本年度の活動について、「渋谷学」及び「共存学」のグループごとに報告する。

「渋谷学」グループ

「渋谷学」グループの渋谷学研究会では、渋谷で生まれ育った作家の平岩弓枝氏を招いて公開講演会「渋谷のむかし」を開催した。この講演会は、当初三月十三日に予定されていたが、同月十一日の大地震とその影響を考慮して延期されていたものである。改めて、五月二十一日(土)午後二時〜三時三十分(常磐松ホー

ルで行われた。

代々木八幡宮の宮司の家に生まれた平岩さんは、その土地と深く結びついた幼少期の思い出から説き起こし、作家としての人生における経験と昔の「渋谷」の風景について語った。会場に集まった聴衆からは、平岩氏の話に関連して、往時の「渋谷」のありようについてさらに詳細を尋ねる質問が出されるなど、地域の具体的な姿を知ろうとする意欲に満ちた講演会となった。

平成二十三年度第一回渋谷学研究会は、九月十日(土)午後二時〜五時半に、「都市と闇市・テキヤ」をテーマとして開催された。これは、戦後の新宿における闇市の発生・展開をめぐる都市史研究と、墨東地域におけるテキヤの襲名慣行と儀礼に関する民俗学的研究から、都市とそこに暮らす人々の営みを考えようとするものである。報告は、石博督和氏(明治大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程、同大学理工学部建築学科助手)による「新宿駅近傍の形成過程一九四五〜一九七〇

―闇市の発生とその整理―」と厚香苗氏(国立歴史民俗博物館外来研究員)による「死んでも名前を残さない―テキヤの襲名慣行と儀礼―」である。石博督氏は新宿の土地利や建物の変容について、地図や写真資料など豊富な資料を用いながら論じた。また、厚氏は墨東地域におけるテキヤの襲名慣行について、充実したフィールドワークにもとづいて論じた。戦後の渋谷の都市史や都

市民俗との比較などをめぐって興味深い議論が行われた。

調査としては、毎年秋に行われる金王八幡宮の例祭調査をあげることが出来る。昨年は三年に一度の神幸祭が行われ、鳳輦が出て氏子区域を回るといふ様子を観察したが、今回はそれとは異なった例祭の様子が見られた。調査には渋谷学研究会に属する教員・研究員に加えて、関心をもつ大学院生が参加した。

また、渋谷区松濤の地は、もと鍋島藩の屋敷があったことで知られているが、近代におけるこの地が経験した変化を理解するためには、鍋島藩関係の資料調査が不可欠である。これについて、二月に上山和雄教授と手塚雄太研究補助員が佐賀に史料調査に出かけた。

二月二十五日(土)午後一時半〜四時半には、第三回國學院大學渋谷学シンポジウムとして「結節点としての渋谷―江戸から東京へ―」が開かれる。このシンポジウムでは、近世後期から維新期にかけての渋谷を対象とし、それを江戸周縁に位置する地と捉え、江戸中心部とは異なる性格を持つ青物市場、西条藩藩邸を媒介にした四国伊予から渋谷への人的移動、江戸から当該地へ集団移転させられてきた「神祇職」たちの動向などを事例として、渋谷がさまざまな関係の結節点として機能してきた点を検討する。発題者とテーマは、「幕末維新期における青物市場―青山久保町を事例として―」岩橋清美氏(東京都公文書館)、「幕末維新期、



藩邸をめぐる人の移動―伊予西条から渋谷へ―」吉岡孝(本学)、「近世後期における江戸「神祇職」の集団移転」松本久史(本学)である。コメンテーターに北原進氏(立正大学名誉教授)と竹ノ内雅人氏(飯田市歴史研究所)を迎え、根岸茂夫(本学)が司会を務める。歴史的アプローチからの渋谷の理解が深まることを期待している。

「共存学」グループ

「共存学」グループではこれまで、方法的試行として、①過疎化・高齢化、環境再生等に向き合う国内地域社会(ローカル)、②国家・民族間の相互尊重と安定を模索する東・南アジア社会(リージョナル)、③環境変動、生物・文化・社会多様性に対応する地球社会(グローバル)の三層の次元の視点を設定して、「共

存」をキーワードとする諸相に光を当て、より多様な関係性や可能性を浮かび上がらせようとしてきた。

この一環として、平成二十三年一月に公開フォーラム「生命と文化の多様性」(本紙十頁参照)を実施し、そこで確認した文化的多様性の再認識、共生や持続可能性に至る以前の原基的な存在受容形態としての「共存」という問題意識を骨格としつつ、更に「都市」への視点を持つ渋谷学との合同を踏まえて、上記①②③のパスベクトタイプの再編について方法的な協議を重ねた。共存社会モデルを導く上での「Ⅱ 農山漁村」「Ⅲ 日本」「Ⅳ グローバル化する世界」という領域設定は、この結果導かれたものである。

他方、この途上で日本社会を襲った東日本大震災への学術的な対応も、地域社会の再生と共存社会という観点から、重要な課題の一部となった。まずは平成二十三年七月に共存社会システム学会との共催により、公開シンポジウム「日本再生のみちすじと世界のこれから―グローバル化と共存・共生社会―」を開催し、特にエネルギー問題や原発事故への社会的対応を軸として、学外の関連研究者と共に討議を行った。平成二十四年二月にも、共存社会システム学会との共催フォーラムが予定されている。

また震災から半年を経た九月には、岩手県一関市・陸前高田市、宮城県気仙沼市にて、被災者を支援するボランティア団体やNGO関係者、避

難所となった神社関係者、避難民の方々などへの聞き取り調査を実施した。研究調査の名分の下に、被災者や現場支援者の方々を傷つけることがないように、最大限に配慮しながらの調査であったが、被災者支援の現場での様々な困難、及び神社の公共的性格が被災地において持つ機能の二つの側面について、理解を深めることができた。

こうした活動と並行して、上述公開フォーラムに於ける報告を再構成し、これを導入部として「共存学」全体の輪郭を示す書籍の出版を計画して、主にその企画のために研究報告検討会を四回ほど行った。この書籍は『共存学・文化・社会の多様性』(弘文堂)として平成二十四年三月に刊行される。その構成は、第一部「もり・さと・うみ」が文化多様性と持続可能社会を主題とし、以下「共存」をキーワードとして第二部「地域・生活・環境」が地域・事例研究の、第三部「近世から現代へ」が日本の歴史「伝統と近代化」に関する研究の、第四部「アジアから世界へ」が広域・グローバル社会研究の成果報告となっている。第二部以下はおのおのが、本事業の領域Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに対応するものである。

以上の通り、本年度の共存学グループは、事業の全体を貫く「共存社会」という課題設定が、ややもすれば曖昧になりがちである点を、対象領域の輪郭を階層化し、可能な限り明確化することで補強する作業を試みた。この結果、本グループに

おいては「共存」を、対立・敵対を回避する消極的意味合いだけでなく、より創造的な関係性構築への可能性を含みこんだ様態と捉えることが、了解事項として共有された。

他方で、本年度主に扱われた自然環境や震災復興等の個別課題も重要ではあるが、これらは研究全体と深く関わりながらも、本来は「共存社会」という総合課題の下位に属する部分的問題である。本学の建学の精神に則った総合的な学際的問題領域の開拓、という本事業全体の趣旨を踏まえ、特定の課題のみが前景化するような事がないよう、より方法的な検討を深める必要があると考えられる。

(文責・遠藤潤、菅浩二)



彙報

※伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニュースレター)、博物館学教育研究情報センターの活動については「高度博物館学教育プログラム」News Letter、ホームページなどを参照ください。

会議

○全体

- ・平成二十三年度第二回企画委員会、平成二十三年七月二十日(水) 十一時～十一時四十分、A M C棟五階会議室○六
- ・第三回企画委員会、平成二十三年九月七日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・第四回企画委員会、平成二十三年十一月十六日(水) 十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・第五回企画委員会、平成二十四年一月二十五日(水) 十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十三年度第三回運営委員会、平成二十三年十月五日(水) 十一時～十一時三十分、若木タワー地下一階会議室○三

○日本文化研究所

- ・平成二十三年度第二回所員会議、平成二十三年七月六日(水)、十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・第三回所員会議、平成二十三年八月三十一日(水)、十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・第四回所員会議、平成二十三年十一月九日(水)、十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・第五回所員会議、平成二十四年一月十八日(水)、十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六

○学術資料館

- ・平成二十三年度第二回学術資料館会議、平成二十三年七月二十七日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・第三回学術資料館会議、平成二十四年一月十八日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十三年度第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十三年七月二十七日(水) 十三時～十三時四十分、A M C棟五階会議室○六
- ・第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十三年十二月八日(木) (持ち回り稟議)

○研究開発推進センター

- ・平成二十三年度第二回研究開発推進センター会議、平成二十三年八月

- 三十日(火) 十一時～十二時、若木タワー地下会議室○一
- ・第三回研究開発推進センター会議、平成二十三年十二月六日(火) 十四時三十分～十五時三十分、A M C棟五階会議室○六

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・第三十七回 日本文化を知る講座「二十周年記念講座「現代に息づく神道文化」、共催「渋谷区教育委員会、各回、十三時三十分～十五時三十分、渋谷キャンパス二一〇一教室

- ◇第一回 六月四日(土)「忘れてはならない稲作の風土観念」、講師「茂木栄(國學院大學神道文化学部教授)
- ◇第二回 六月十一日(土)「弥生・古墳時代から続く鏡・剣・玉のまつり」、講師「杉山林継(國學院大學名誉教授)
- ◇第三回 六月十八日(土)「神道から描く現代日本」、講師「阪本是丸(國學院大學神道文化学部教授)
- ◇第四回 六月二十五日(土)「世界から見た神道」、講師「井上順孝(國學院大學神道文化学部教授)

- ・公開学術講演会「地域神社研究のこれから―絆(きずな)と縁(えにし)の神社学―」、講師「櫻井治男(皇學館大学社会福祉学部教授)、平成二十三年十月一日(土)、十五時～十七時、A M C棟一階常磐松ホール

○日本文化研究所

- ・国際研究フォーラム「デジタル映像時代の宗教文化教育―開かれたネットワークによる取り組み―」、パネリスト「Erica Battelli(ニュージーランド、オタゴ大学)、Alan Cummings(イギリス、ロンドン大学)、岩谷彩子(広島大学)、織田雪江(同志社中学校・高等学校)、平藤喜久子(國學院大學)、コメンテーター「岩井洋(帝塚山大学)、司会「黒崎浩行、Norman Havens(國學院大學)、平成二十三年十月十六日(日) 十時三十分～十七時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、共催「科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」、宗教文化教育推進センター(C E R C)

○学術資料館

- ・公開講座「出雲のまつりと信仰」、主催「学術資料館・伝統文化リサーチセンター、共催「島根県教育委員会、平成二十三年十一月六日(日)、島根県職員会館多目的ホール

○研究開発推進センター

- ・「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」合同研究会、平成二十三年七月六日(水) 十六時三十分～、若木タワー八階会議室○七
- ・「招魂と慰霊の系譜に関する基礎的研究」事業(第三十三回「慰霊と追悼」研究会)、報告「ミヤツ・カラヤ(Myat Kalayar)、長崎短期大学准教授)「慰霊巡拝がもたらす日緬

友好の現状」、M. G. シェフタル (Mordecai George Sheftal) 静岡大学情報学部准教授)「Formal kanikaze memorialization in the early postwar period」平成二十三年九月十一日(日) 十四時〜十七時三十分 A M C棟五階会議室〇六

・國學院大學院友神職会総会研究報告会、報告 中野裕三「本居宣長の「迦微」の定義」、平成二十三年十月二十日(木)、若木タワ―地下一階会議室〇二

・シンポジウム「日本再生のみちすじと世界のこれから―グローバル化と共存・共生社会―」、主催 共生社会システム学会、共催 國學院大學研究開発推進センター、基調講演 ① 糸長浩司(飯館村後方支援チーム代表、日本大学生物資源科学部教授、P C C J代表理事)「震災・原発事故と地域の再生―福島県飯館村から考える―」、基調講演 ② 田中優(未来バンク事業組合理事長、日本国際ボランティアセンター理事)「脱原発社会の可能性―もう一つの日本と世界を展望する―」、基調講演 ③ 島崎隆(一橋大学大学院社会学研究科教授)「共存・共生型の人間・自然・社会像の模索―地震・津波・原発の大災害に関連して―」、全体討論 司会進行・古沢広祐(國學院大學教授)、尾関周二(東京農工大学教授)、平成二十三年七月十日(日)、A M C棟五階会議室〇六

・平成二十三年度渋谷学研究会(テーマ「都市と闇市・テキヤ」)、第一報告 石樽督和(明治大学大学院理工

学研究科建築学専攻博士課程後期・同大理工学部建築学科助手)「新宿駅近傍の形成過程 一九四五〜一九七〇―闇市の発生とその整理―」、第二報告 厚香苗(国立歴史民俗博物館外来研究員)「死んでも名前を残さない―テキヤの襲名慣行と儀礼―」、平成二十三年九月十日(土) 十四時〜十七時三十分、A M C棟五階会議室〇六

出張

○日本文化研究所

・平藤喜久子「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクトによる調査のため、長崎県、平成二十三年八月二日(火)〜五日(金)

・遠藤潤、松本久史、小林威朗、小田真裕「國學院大學 国学研究プロジェクトフォーラム」の構築」プロジェクトによる調査のため、金沢市、平成二十三年十一月二日(水)〜四日(金)

○学術資料館

・内川隆志、加藤里美「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」プロジェクトによる調査のため、島根県飯南町頓原・松江市、平成二十三年六月二十一日(火)〜二十二日(水)

・加瀬直弥「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」プロジェクトによる調査のため、京都府京都

市、平成二十三年六月二十日(月)〜二十一日(火)

・田中秀典、新原佑典「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」プロジェクトによる調査のため、埼玉県長瀨町、平成二十三年八月七日(日)

・加瀬直弥「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」プロジェクトによる調査のため、茨城県鹿寝嶋市、平成二十三年十月三十日(日)

・笹生衛、岡田莊司、加瀬直弥「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」プロジェクトによる調査のため、三重県松坂市・伊勢市、平成二十三年十一月三日(木)〜五日(土)

・内川隆志、深澤太郎、新原佑典、朝倉一貴、平野哲也、鈴木孝規、蔵野泰洋、大日方一郎、北澤宏明、吉田恵二、笹生衛、舟木勇次、熊倉史子「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」プロジェクトによる調査のため、島根県飯石郡飯南町、平成二十三年八月三十一日(水)〜九月十日(土)

・新原佑典、齋藤しおり「柴田常恵資料・宮地直一資料に関する調査」プロジェクトによる調査のため、青森県平川市、平成二十三年十一月三日(木)〜四日(金)

・吉田恵二「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」による公開講座開催に伴う出張、島根県松江市、平成二十三年十一月五日(土)〜六日(日)

・田中秀典「青森県弘前地方にお

ける柴田常恵関係資料の調査」プロジェクトによる調査のため、青森県平川市・弘前市・青森市、平成二十三年十一月五日(土)〜六日(日)

・田中秀典「大阪地方における柴田常恵関係資料の調査」プロジェクトによる調査のため、大阪府大阪市・東大阪市、平成二十四年一月五日(木)〜六日(金)

○校史・学術資産研究センター

・齊藤智朗「全国大学史資料協議会二〇一一年度総会・全国研究会」、皇學館大学、平成二十三年十月五日(水)〜六日(木)

○研究開発推進センター

・大原康男、中山郁、菅浩二、宮本誉士、坂井久能「横須賀市営馬門山墓地(横須賀海軍墓地)調査」、神奈川県横須賀市、平成二十三年七月三十一日(日)

・茂木栄、ノルマン・ヘイヴンズ、黒崎浩行、松本久史、菅浩二、宮本誉士、冬月律、西俣先子「岩手県フィールド調査」、岩手県一関市、陸前高田市、宮城県気仙沼市、平成二十三年九月十一日(日)〜十三日(火)

・菅浩二、宮本誉士、坂井久能「佐世保市東山海軍墓地及び関連資料調査」、長崎県佐世保市、平成二十四年一月二十九日(日)〜三十一日(火)

資料紹介 宮地直一コレクション

宮地直一(明治十九年〜昭和二十四年)は、現在の神道史学の基礎を築いた人物の一人である。宮地直一コレクションは、宮地が所蔵していた資料であり、遺族より國學院大學に寄贈された。これは宮地が國學院大學に於いて教鞭をとっていた

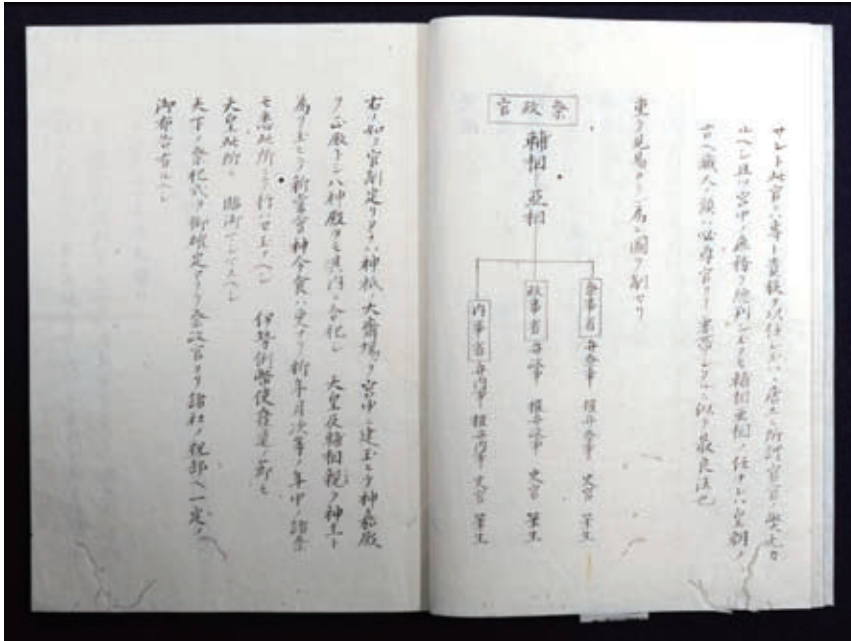
縁による。このコレクションは、蔵書(和装本・洋装本)、天神人形、写真帳、全国各地の絵葉書・観光案内、羽田野神主家文書、ノート・原稿等からなる。このうち、和装本は伝統文化リ

サーチセンターにおいて調査・整理を行い、ウェブサイト上に目録を公開した。ノート・原稿等についても同センターで調査・整理を進めている。和装本のうちには、小中村清矩自筆『官制議』(宮地…二八六三、写真上段)をはじめ、宮地が収集し、研究に用いた多くの資料がある。『諏訪神道書』(『諏訪大明神祭祀記』と合冊、宮地…一一三六、写真下段、以下宮地本)も宮地の研究資料の一つである。これは昭和十一年

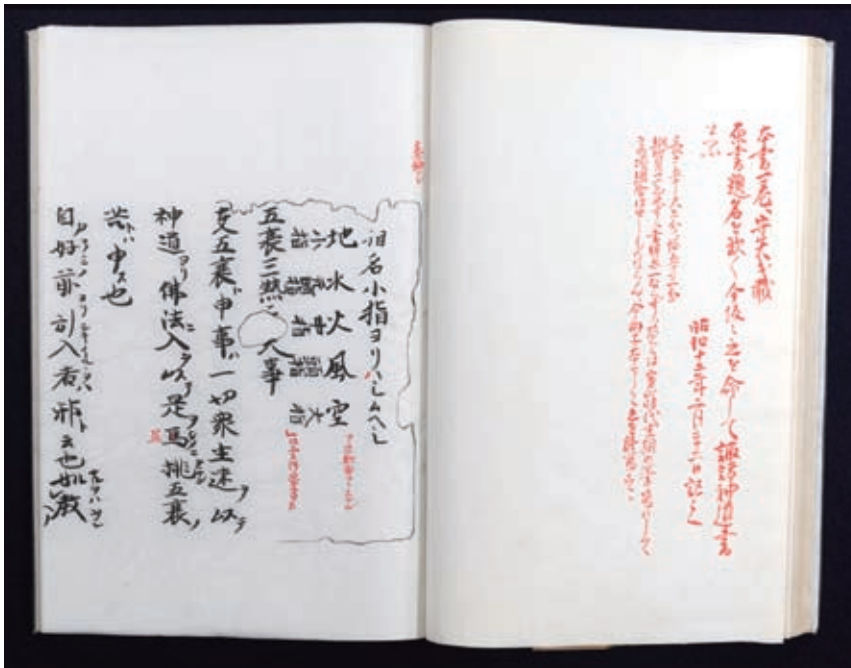
に『諏訪史』執筆のため、守矢家所蔵本を調査し、それを書写したものである。この『諏訪神道書』には、『諏訪史』第二巻(後編)(信濃教育会諏訪部会、一九三七年)でふれている。宮地本の底本は現在、守矢文書の中に確認できないとされ(細田貴助『県宝守矢文書を読む』ほおずき書籍、二〇〇三年)、翻刻は『復刻 諏訪史料叢書』五(中央企画、一九八四年)に、「諏訪大明神深秘御本事大事」として収録される。しかし、この翻刻は『諏訪神道書』が一筆ではない複数の切紙類を継いだ資料でありながら、その継ぎ目が記されないなどの難点がある。対して、宮地本は、注記が付された透写本であり、このような不足を補うことができる。この点は、船田淳一氏によって、すでに指摘されている(『神仏と儀礼の中世』法藏館、二〇一一年)。

『諏訪神道書』のほかに、宮地の教えを受け、本学教授をつとめた西田長男(明治四十二年〜昭和五十六年)が所蔵し、かつ論文で用いた『諸大事』(宮地…一七八一)、『四重秘釈第二』(宮地…三四三六)の透写本がある。これらは、これまで存在は知られていたが、閲覧することのできなかつた資料である。今後、より多く利用され、研究が進展することが期待される。

(大東敬明)



『官制議』



『諏訪神道書』